
終わる町の楽しい夢

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わる町の楽しい夢

【Nコード】

N8884M

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

突然自分の住む町から人がいなくなり出られなくなった少女のお話。

高校生の頃、夜に車に乗って田舎の町中に行くと真っ暗だった。人が住んでいるはずなのに静かで暗くてゴーストタウンみたいだった。

……町が死んでいく、そう思ったら怖くなった。

数年後、大学生になって同じ町中にある銀行でお金をおろした、冬の薄青の空が広がり、乾いた風が吹いている。けれど外を出るとどこにも人の姿はなかった。

排気ガスで根本を中心に大ざっぱに黒くなった雪、音量が安定しないBGM、わんと人懐っこそうな犬の鳴き声が聞こえる。ここには人がいた、はずだけれど、少し狂った場所にも来た気がする。

走って走って町のはずれにきた。見上げると薄青の空は途中で切れて、群青の色が広がっている。星の見えない夜空を見るような、地中深くにいるような……どちらともにも見える色だった。そしてちょうど町の終わり、境界線の場所から私は出られなくなっていた。透明な壁があって、血が出るほど叩いても、道具をつかっても、壊れなかったのだ。

私はこの町から出られなくなった。

人は消えてしまったのかそれとも町が消えたのか分からないけど、私しか人間はいなかった。だけど町は何だか落ち着いていた。

いや嬉しそうだった。私以外に誰も人間はいないのにガスも電灯も水道も流れてスーパールの物の入れ替えも行われた。町が自発的に町を動かしているように見えた。

感情を出すのも疲れて面倒くさくなった私は誰かの家の大きなベツトで横になっていた。

その家には猫が一匹いた。

生粋の家猫みたいで、本来は不法侵入者にすぎない私に、甘えた鳴き声を出しながらすり寄ってきた。窓にすりすり身と身を寄せている姿をよく見かけた。

何日も私はベツトで過ごしていた。

猫は朝になるとにゃーなー鳴いてご飯を要求した。私は無視したり近づいてきた猫を邪険にした。何度か強く叩いて部屋から追い出した事もあった。やがて猫は近寄らなくなった。

雪が降った。

地吹雪になった。

太陽の光を雪が反射した。

曇りになった。

白い月と雪が夜を明るくした。

ベツトの中で暮らしてはじめはお風呂に入るのが面倒くさくなった。だって清潔じゃない私を気にする人もいない。ベツトの中に体を横になり続けて、体を動かすのも億劫になって、もう夢の中で沈みたくなった。

次に食べるのが面倒くさくなった。

ベツトの中で毛布にくるまり続ける生活に大きなエネルギーはいらない。ああ限界かもと思ったら、食べることにした。そうしたらぼんやりとするのが得意になった。

最後はトイレにいくのが面倒くさくなり始めた。でも毛布を汚したら嫌だしお腹が痛くなるからきちんに行った。ふとある時思った。

トイレが辛いなあ、寝続けたいなあ。
もお何もかもが面倒くさいなあ。

生きるって何でこんなに面倒なの。

何十日もたったかもしれない。

十日目から数える事が面倒くさくなったから分からない。

お風呂に珍しく入ることにした。

五日前からごはんを食べていない。でもお腹はすいてない。

二日前からトイレをしてない。おしっこしたいって思えないから。

人の家のタンスから着替えを漁る私に猫がすり寄ってきた。猫は家中に鍵をかけていたから外には出られないはずだ。けれどトイレをした形跡も餌を漁った形跡もなかった。

つやつやした毛並み、ふっくらした体で甘えた鳴き声を出していた。

異常だって分かった。

ご飯が本当いらなくて、怖くなって食べたいと思ったら、冷蔵庫満杯にあった食べ物全部を食べてしまう自分がいた。トイレに行く気が起きなくて、何時間も便座に座ったけど結局出なかった。今もお風呂に入ってボディソープ丸ごと一本スポンジにつけて体を洗ってるけど、汚れが全然でない、垢がない。何十日放置されたはずの猫は浴槽の濡れた縁に四足を乗せて、呆然としている私の頬をざらつく舌でなめた。

現実に戻った私を猫はくりくりとした大きな目で見つめてきた。
同族を見る目だった。

どうして怖がっているの。

そう尋ねているように見えた。

私は人間だった？ そうだったはずだ。

だけど今は誰もいないから、私は自分が人間であることがよく分
らなく、いやどうでもよくなった。実は人形なんですよと言っても誰
も否定もしない町になってしまった。

とうとう理解してしまったから、狂った町に私は身を任せることに
した。空っぽになった方が幸せだと分かってしまった。もう私は
人間じゃなくて町が望む町の欠片。人間によって始まり終わりを迎
えかけた町の、楽しい夢。

あんなにごしごしとスポンジでこすったのに赤みも皮膚もはがれな
かった体に服を身につけて、白いコートを羽織った。
久しぶりに散歩してみると町は生き生きとしていた。無人の商店街
は大安売りのセールののぼりで彩られていた。

固くなった雪の上を久しぶりに歩いてみた。

そして抹茶色のジャムをぬりつけた硬いクッキーをかじって私はゆ
っくりと空を眺めた。怖くなんかなかった、幸せを食べた気がした。
こんな場所に来なかったらきつと空なんて眺める余裕なんてない。
マア、にんげんはとつてもいそがしいからしょうがない。

真夏。暈の痕を顔につけながら見た白昼夢に軽く笑いながら起きた。
ふと視界に入った鏡の中、暗く沈んだ町にぽつんとある電燈の灯り
に照らされた雪の上で、私が眠っている。

鏡の中の安心しきった寝顔の私に声を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8884m/>

終わる町の楽しい夢

2010年10月8日11時34分発行